

『キケンな誘惑』

著: 遠野春日

ill: 金ひかる

街は師走の慌(あわ)ただしさに満ちていた。

昶が「すがの」に着いてみると、史朗は先に座って待っていた。大きな背中を一目見ただけでわかる。カウンターにずらりと並んで座っている誰も彼もが、似通った地味なスーツ姿の背中だというのに、不思議なものである。史朗も目立たない地味な灰色の上着を着ていた。外回りをする営業兼技術社員なので、得意先の心(しん)証(しょう)を悪くする派手な格好はできないようだった。

昶はトレンチコートを入口で脱ぐと、出迎えに来た店員の女の子にそれを預け、史朗の背中を目指して奥に進んだ。

この店は特別格式張ったところではない。居酒屋よりは上品で手の込んだ料理を出す、座敷よりカウンターが中心で、値段もそこそこだった。美(び)貌(ぼう)の姉さん女房であるおかみさんがフロアを取り仕切り、ハンサムで腕も立つ旦那(だんな)さんが板(いた)前(まえ)という具合だ。

ここを利用し始めたのは、いきあたりぼったりに入った偶然からで、最初は二人とも知り合いと出くわさないかと慎重になっていた。結局、一年大丈夫だったことで、今では少し気を抜いていた。絶対に誰かと会うとまずいというわけでもないのだが、男同士で付き合っている後ろめたさはなかなか拭い去れなかったのだ。

「待たせたか」

「ああ、昶さん」

史朗は昶が隣の席に座ると、とても嬉しそうに昶の方を振り向いた。

会いたかった、と感情を隠さない素直な顔つきをする。

昶自身はどうしても史朗ほどにはストレートな表情ができなかったが、史朗はそんな昶の慎重さと不器用さに馴(な)染(じ)んでいるようだった。昶が微笑(ほほえ)まなくても、会えたことを嬉しく思っているのだとわかってくれる。昶としては非常に楽だった。史朗の前では何も無理をする必要がない。

「外は寒いな」

「もうあと三週間もしたら新年ですからね。昶さんたちの会社は例年どおりですか」

「冬休みのことか？ うちも今年も三十日の午前中まで仕事だよ」

「そのうちあなたと温泉旅行に行ったりすることができるようになるといいなあ。あ、でも、こういうのは俺のわがままですから、気にしないでくださいね」

史朗は後半を慌てて言い足した。昶が僅かに困惑した表情を浮かべてしまったのを見逃さなかったからだろう。まだ二十代の若さの割に、史朗は大人っぽい。ときどき昶もどっちが年上なのか忘れてしまうほどだった。

史朗が懐(ふところ)の大きな人間であろうと心がけるのは、昶のためなのかもしれない。今の昶は、どちらかというと、史朗に守られている立場だった。信じられないほど甘やかされて、歳のことなどは関係なく思えるほど、包み込んでもらっている。それは決して嫌ではなく、屈辱的でもない。

このままの状態が長続きするのを望んでさえた。

「俺は三(さん)が日(にち)くらいは実家に帰るつもりだけど、昶さんはどうするんですか」

「たぶん、一日は田舎の両親に顔を見せに帰るだろうな。要に会いたいから連れて帰れと言われるだろうし」

昶は三人兄弟の末っ子で、特に可愛がられて育った自覚がある。兄二人とは五つほど歳が開いていたからか、彼らにもべたべたに甘やかされた。今、上の兄が父の家業を継いで町医者をしており、下の兄は公務員になっている。二人とも結婚しているのだが、揃って女の子ばかりを授かっている。そのせいか、昶の一人息子である要は、子供時代の昶に輪をかけた可愛がられぶりである。ずいぶん過去の話だが、二人ともから「養子に欲しい」というようなことを仄(ほの)めかされたこともあった。

要には小学校に上がった頃から母親がいなかった。

当時は昶も迷った。とにかく仕事が忙しかったし、男手ひとつで息子を育て上げる自信もなかったからだ。

けれど今では、要を手放したりしなくて本当によかったと思う。

自分は決して理想的な父親ではない、むしろその逆かもしれないが、息子がいたからここまでがんばってこられた。果たして要にどこまで伝わっているのかは疑問だが、昶にとって息子は他の何よりも大事な存在だった。

そのことは史朗も十分に理解してくれていた。

「要くんもお祖父ちゃんお祖母ちゃんには甘えるんでしょうね？」

昶は、どうかな、と曖(あい)昧(まい)に答えた。

「いちおう甘えるふりはするようだが、どちらかというと相手を喜ばせるために甘えてみせているような感じがする。それともこれは俺の僻(ひが)みかもしれないな。要は俺相手だと絶対に甘えようとしなから、悔しいんだ」

そんなことないでしょ、と史朗が笑った。

昶は史朗に杯を満たされ、ゆっくりと唇をつけた。史朗が選んで先に飲んでいた日本酒は、彼の実家が造っているものだった。この割烹にはそれが入っていて、ここを利用する理由のひとつになっていた。

史朗の実家は造り酒屋である。

昶にとっては、今こうして史朗というすべてのきっかけは、彼の実家の天草酒造にあるのだと思われた。奇妙な縁だった。最初に史朗からこのことを打ち明けられたときには、そんなことがあるのかと信じられない気持ちがしたものだ。

「昶さんは……俺とこんな形で付き合っていること、後悔していないですか？」

杯を指に持ったまま、少しでも沈黙の間を作った昶に、史朗はひどく控えめな口調でそう聞いてきた。

昶は不意を衝(つ)かれた気分で、隣に座る史朗の男らしく整った顔を見た。史朗も昶に顔を向けていた。昶に対してきっぱりとした自信を持ちきれない辛さが、史朗の若い顔の中に微かな陰りを含み込ませているように見えた。

瞬間、昶は迷ってしまい、史朗の問いをはっきり否定してやることができなかった。

決して後悔しているわけではなかった。

けれど、いつも心の一部には不安を感じている。こんな関係がどこまで続くのか、万一周圍の人々に知られたらどうするのか、妻さえも本当に愛していたのかどうか今と

なっちは断言できない自分の感情がどのくらい長続きするのかなど、心配する要素はたくさんある。それらは今すぐどうにかなるようなこととも思えない。

昶は酒で唇を湿らせてから、
「後悔はしていないつもりだ」

と答えた。

史朗が優しい瞳で昶を見ている。彼の落ち着きぶりと包容力は、昶を、自分のほうが年下なのではないかと頻りに錯覚させた。元来が末っ子育ちの昶には、史朗との立場の逆転がかえって心地よい時がある。

「無理しないでいいですよ。気持ちが辛くなったら、少し休みたいとか、距離を置きたいとか、ちゃんと言ってくださいね」

「おまえは、俺がそんなことを言っても平気なのか？」

「平気じゃないかもしれないけど、あなたが潰(つぶ)れてしまうよりは絶対そっちのほうがいいから。あなたは見かけを裏切らずに繊細な人だと思うので、俺、心配なんです」

「繊細か？」

昶は苦笑してしまった。確かに綺麗(きれい)な顔をしているとはよく言われるが、繊細だとは思っていなかった。ましてや、精神までナイーブだとは考えたこともない。

こう見えても昶は各支店を地方別にまとめて一単位にした地区内においても、かなりの遣(や)り手営業マンで通っていた。口八丁の交渉がうまいというより、根気とねばり強さ、的確な判断力と、なによりも先(せん)見(けい)の明(めい)がある頭の良さで、群を抜いた成績を上げ続けてきた男なのだ。ときには計算高い狡(ずる)さも発揮したし、搦(から)め手や外堀から埋めていくような話の持っていく方もした。自分でも要領のいいほうだと思う。

「繊細ですよ」

史朗は真剣な眼差(まなざ)しで昶を直視したまま、真面目に返事をした。

いい男だよな、と昶はあらためて感じる。

ときどき史朗はとてもしよい顔をする。人間として心から信頼するに足りると思わせられるような顔だ。昶は史朗が自分にこんな表情を向けるのが、勿(もつ)体(たい)ないような気もした。うらぶれたバツイチ男を相手にしなくても、他にいくらでも素晴らしい人が望めるに違いないのだ。史朗は男は昶が初めてだと告白した。それが本当なら、本来は普通の嗜好(しこう)なわけなのだろうから、もっと安定した将来を考えるほうがいい気がして仕方がない。

「もしかして今俺に見(み)惚(と)れています？」

史朗がふっと硬い表情を崩して、いかにも冗談めかしたことを言った。

昶は、この野郎、と思ったが、逆に素直に頷(うなず)いてやった。

「ああ」

えっ、と史朗が当惑する。まさか昶に肯定されるとは考えていなかったようだ。

「もうずっと見惚(と)れているよ」

昶がからかうように重ねて言っていると、史朗は首筋を朱色に染めて、そっぽを向いてしまった。

料理にもひととおりの手をつけ終えていたので、昶は史朗の肩を軽く叩いて、先に席を立つ。

「……行こうか」

史朗も立って昶の背中を追ってきた。
外はますます冷え込んでいる。
並んで雑踏の中を歩いていながら、昶は史朗の横に立っていただけることの幸福感を噛みしめていた。
この場所を誰かに譲り渡すことなどは、もうできなくなっている気がする。
史朗にとって本当にこれでいいのかと憂慮するのも事実だが、自分からこの場所を退く勇気はなかなか起こせそうになかった。

本文 p15～23 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>